

事業継続のために大切なのは「人」 絆をいっそう深め次世代への飛躍を期す

昭和42年に、地元を代表するしょうゆメーカーの輸送を手がけてきた運送会社6社が合併して誕生した野田小型運送(株) (深津憲一代表取締役社長)。設立以来、しょうゆ輸送を中心に事業を展開するとともに、ガス付臭剤輸送にも取り組んでいる。

深津社長は、「人」を大事にした経営を続けるとともに、「これまで地域でお世話になってきた皆様方のお役に立ちたい」との強い思いをもち、地域貢献活動も数多く行っている。



野田の空を優雅にはばたくコウノトリが描かれた同社のトラックの前に立つ深津社長

■「コウノトリラッピングトラック」で地元をPR 緊急物資輸送体制整備にも取り組む

千葉県野田市はしょうゆの郷として、江戸時代から大きく発展した街である。大正6年には野田醤油(株) (現・キッコーマン(株)) が設立。しょうゆ製造の発展とともに、醤油工場への馬車による運搬も広がった。昭和30年代前半になると、これまでの馬車による運搬から自動車による運搬に切り替わったため、馬方が寄り合って6つの運送会社が設立された。その後、キッコーマンの茂木克己元社長の命により、昭和42年に6運送会社が合併し、誕生したのが野田小型運送(株)である。

同社では設立当初、しょうゆの空きビン輸送などを主な業務としており、空きビンを検収場から瓶詰工程へ移送する役割を担っていた。昭和43年にはビン箱用のクランプリフトを新たに導入し、荷役作業の効率化を進めた。また、しょうゆ輸送に関しては、タンクローリー車の他に平ボディー車を活用し、平ボディー車の荷台部分に小型タンクを載せて輸送を行うようにするなど、工場からの輸送の際の輸送効率を高める工夫を行ってきた。

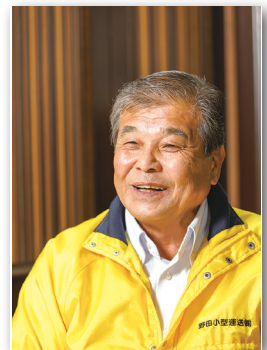
一方、昭和51年からは、危険物第4類であるガス付臭剤輸送を開始。ガス付臭剤輸送を手がける運送会社は少なく、特に東日本では同社が一手に輸送を引き受けているという。

同社では、かつては青森県など比較的遠方への輸送も手がけていたが、現在では遠くでも新潟県や山形県、静岡県など、関東地方とその周辺部に輸送範囲を限定している。これは、改善基準告示で定められている、1日の拘束時間の上限16時間以内を遵守するための措置であり、荷主企業に対しても改善基準告示の内容について説明した上で、荷主企業の理解を得ながら改善基準告示の遵守に努め、ドライバーの労働環境改善に繋げている。

同社では従業員の満足度向上への取り組みも進めている。コロナ禍前は社員旅行や従業員の家族も参加してのバーベキューを開催していた。また、同社で保有している10人乗りワゴン車を従業員に

貸し出し、家族旅行の際などに活用してもらい取り組みも行っている。さらに、同社では食品輸送を担っていることもあり、コロナ禍以前から毎朝点呼時に、従業員に対してマスクを1日1枚配布する対応を取っていたが、コロナ禍以後は毎月28日の給料日に、給与明細とともにマスク1箱とたまご1ケースをプレゼントするようにしている。

「事業を展開していくにあたって、最も大事なものは『人』だと私は考えています。当社の社員数は現在40人弱で、全ての従業員の顔が見える規模だと考えています。経営者としては、従業員の話の積極的に聞いて従業員の仕事への思いを汲み取り、会社として実現できることは実現していくよう努めてきました。こうしたこともあって、当社の従業員は定着率が比較的良く、定年を迎えるまで長年勤務する従業員も少なくありません」(深津社長)



深津 憲一 代表取締役社長

ところで、同社が保有する41台のトラックのうち10台には、国の特別天然記念物であるコウノトリが描かれたラッピングが施されている。これは、野田市がコウノトリの保護に力を入れていることを広くアピールするためのものである。

市内ではかつて農業による水質汚染などが進み、かつて生息していたコウノトリが見られなくなってしまった。野田市では、平成24年12月から市内の「こうのとのり」でコウノトリを飼育するほか、減農薬農法の拡充により自然環境の回復に努めるなど、「コウノトリの住む里づくり」への取り組みを進めている。深津社長も、野田市に本社を構える焼鳥・うなぎチェーン店から、コウノトリの



同社の柱となるしょうゆ輸送ではトラックの衛生管理が必須で、ドライバーが丁寧にトラックをきれいにします



平ボディ車用の小型タンクをフォークリフトで輸送。小型タンク導入により輸送効率が高まった



従業員への感謝の気持ちを込めて、給料日には給与明細とともにマスク1箱とたまご1ケースを手渡す

えさとなるドジョウを譲り受けるなど、コウノトリ保護への取り組みに関わっており、コウノトリ保護活動の中心となって活動していた前・野田市長からの要請を受けて、24年からラッピングトラックの運行を開始している。

「当社では10年前からコウノトリのラッピングトラックの運行を行っていますが、これまでに小さな事故さえも発生していません。これは、当社のドライバーがコウノトリとともに当社のトラックを大切にしていることの現れかもしれません。」(同)

同社では、大規模災害発生時への取り組みも進めている。23年の東日本大震災発生直後には、同社のトラックがいち早く、野田市の備蓄品を岩手県野田村まで輸送した。なお、その後も千葉県トラック協会野田支部では緊急物資輸送を展開したが、同支部では緊急物資輸送に限り、輸送の発注元である自治体から運賃を収受せず、ボランティアという形で輸送にあたったという。

「未曾有の大災害に直面し、多くの被災者の方が困っているのを見て、『何としても被害に遭われた皆様をお助けしたい』との思いで緊急物資輸送にあたってきました。運送会社としてできることで、被災者の皆様に貢献できることは何かと考え、支部を挙げて輸送に取り組みました。」(同)

令和2年には、千葉県ト協野田支部と野田市は「災害時における救援物資の輸送業務等に関する協定」を締結。救援物資の輸送業務等を迅速かつ的確に行うことのできる体制が整備された。また同社では、野田市が毎年実施している「野田市総合防災訓練」に参加し、同社のトラックによる備蓄品輸送訓練などを実施している。

ところで、深津社長は昭和46年に高校を卒業後、同社に入社し、運送業界の経験を着実に積み重ねてきた。仕事を続けていく中では、周りの多くの人々に助けられたという。かつて同社では24時間体制で運行が行われており、当時配車係を務めていた深津社長は、深夜0時になっても備車が見つからず、苦労したこともしばしばだった。その際には、当時の役員も夜遅くまで仕事にあたり、輸送の最前線で深夜まで働く従業員たちを支えたという。「仕事でも、仕事以外でも、お互い支え合って過ごしてきた当時の経験が、今も活かしています」と、深津社長は当時を振り返る。

同社の2代目社長であり、深津社長の父親でもある深津三氏が平成5年に他界し、その後10年間、深津社長は2人の社長に仕えてきた。そして、15年に深津社長は代表取締役役に就任している。

深津社長は現在70歳となり、同社の経営の指揮を執り続けるとともに、今後を見据えた取り組みも進めている。

「人間は、いつどうなるか分かりません。経営者としては、もし仮に自分がいなくなったとしても事業を継続していくために、事前の備えを十二分に行っておく必要があると感じています。今後、当社の経営を引き継ぐ次世代の方々に向けては、多くの方々としっかりとコミュニケーションを取りながら、当社の現在の事業を確実なものにしていただきたいと思います。当社はこれまで、荷主企業のすぐ近くに営業拠点を構え、荷主企業との関係構築に努めてきました。今後も当社の地の利を活かし、コミュニケーションをより深化させることで荷主企業との関係を盤石なものにしてもらいたい。荷主企業との強固な絆から、当社の次世代を支えるような新たな仕事が生まれてくることを期待したいです。」(同)

ホットにゆーす

■ 「地域の皆様のお役に立ちたい」 毎朝の立哨指導を通じ交通安全に取り組む

深津社長は毎朝、地域の小学校の交通指導員として、児童の登校時の立哨指導を行っている。

地元で交通指導員の募集が行われているのを知った深津社長は、「これまで地域でお世話になってきた皆様方のお役に立ちたい」との思いで、交通指導員に応募し、毎日児童たちを見守っている。

長年立哨指導を行ってきたことが評価され、深津社長は現在、野田交通安全協会会長として、地元における交通安全運動にも力を入れている。



深津社長の日課となっている立哨指導。子どもたちが安全に登校できるよう、毎朝見守っている

企業プロフィール

野田小型運送株式会社

代表取締役社長 深津 憲一
本社 千葉県野田市野田229
従業員 38人(うちドライバー30人)
台数 41台